

エッセイ — 特集：複数言語環境で成長する子どもたちはどのように言語と向き合い、生きようとしているのか

「母の日本」から「私の日本」への旅

辛かった補習校の後の大学生活

有留 寛大*

© 2023. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

筆者が日本語を教えるボウドイン大学を、今春卒業していった日本語継承話者Yの4年間に
ついて書こうと思う。Yは、筆者の日本語のコースを4つ（中級レベルの日本語3年生を2つ、
上級レベルの日本語4年生を1つ、上級継承話者のためのコースを1つ）受講し、筆者の初級
日本語のコースのLA（チューターのようなもの。後に詳述）として働き、筆者が顧問である学
生日本クラブJSAを引っ張るリーダーであった。実りの多い大学生活を送ったYは、学生の
仲間たちのみならず、多くの教員たちとの間にも素晴らしい関係を築いたが、筆者も、様々な
局面でのYの姿を見続けてきた一人である。Yとの語らいの記録、Yが授業で書いた作文や
ジャーナルなどをもとに、その時々Yの心の動きを追いかけながら、Yの4年間の歩みを振
り返ってみたい。尚、このエッセイは、事前にYに内容を確認してもらい、投稿の了承を得
ていることをお断りしておく。「大丈夫です」と深く頷いてくれたYに感謝したい。

Yと初めて顔を合わせたのは、リモートで行われた日本語プログラムの説明会であった。無
理に自分の話を優先させることなく、他の参加者にも気を配る姿が印象に残っているが、その
姿の下に「日本」への複雑な思いが隠れていることは、その時は知る由もなかった。大学4年

* Bowdoin College (Eメール: haridome@bowdoin.edu)

聞の話の前に、まず、大学入学までの Y について見ていくことにする。

2. 大学入学以前

英語を母語とするアメリカ人の父親と、日本語を母語とする日本人の母親の間に生まれた Y は、アメリカの大都市の郊外で育ち、家庭内では父とは英語で、母と兄とは日本語で話す環境だった。家庭外では基本的に英語で教育を受けるが、週末には日本語学校(補習校)へ通い、毎夏、日本で体験入学をした。日本語に関し Y は「元々は、母が無理矢理日本語学校に行かせたり、日本のテレビや本しかくれなかつたり、全部母の影響で日本語を学び¹、「私が知っている日本の文化は、(中略)全部母から教わられたものでした²と述べている。また、「分からない日本語で話しかけられたり、会ったことのない親戚とご飯を食べたりしても、お母さんは私の翻訳者・代表みたいだったからあまり苦労しませんでした³と、家族を含む日本人との会話も、当時は母に依存した形であったことがうかがえる。

2. 1. 補習校：劣等感

Y は母親に言われるままに、幼、小、中、高と補習校に通い続ける。「補習校を楽しんでいた頃は小学校低学年にあったと思う⁴と言うが、それ以降は大変辛い経験だったようだ。特に漢字が苦手で、国語の授業で指名されて音読する時には、手も声も震え、消え入りたい気持ちになった。Y は、「スラスラと教科書を読みたいクラスメートの教育の邪魔になりたくなくて、自分の存在を小さくしようとした⁵。また、「中学校になって、数学の授業で証明を習い始めた時、私は証明という単語の意味さえ分から⁶ず、「ベッドの下の引き出しに、35点以下の漢字テストを何枚も母から隠していた。」⁷そして、クラスメートと自分を比べ、抜き難い劣等感を植え付けられ、ついには完全に自信喪失してしまう。「周りのクラスメートの日本語力に負けた気分で、私は日本語学校では頭の悪い子だと信じ⁸るようになってしまい、「休み時間の間は、友達がいなくて、一人で机に座っているのが恥ずかしかったから、お手洗いで時間を潰す

1～2 Y の日本語5年生時のジャーナル #11

3 Y の日本語5年生時のジャーナル #1

4 Y の日本語5年生の作文『私の日本』

5～13 Y の日本語5年生の作文『私の日本』

こともあった」⁹と言う。そして「同じハーフで同じ家庭で育ってきたのに」¹⁰、Y「より漢字が読めて日本語学校では弾けていた」¹¹実兄と自分を比べてしまい、更なる劣等感に襲われる。Yは「私が日本語学校で苦労したのは、自分のせいだと思い、ますます自信がなくなってい」¹²き、「どんなに現地校で頑張っても、日本語学校にいる時は、私は悪い子だと思い込んでしまった。」¹³

2. 2. 体験入学：違和感と疎外感

Yは毎年、母親の実家付近で幼稚園から中学3年まで体験入学を続けた。体験入学のおかげで、掃除や、給食などの様々な活動を生徒だけでやることができたことがよかったと、日本の教育制度の長所を認め、「アメリカでは小3まで一人で外出してはいけないと言われていたのが、日本にいと小1の時から普通に一人でお使いに行っていました」¹⁴と述べてもいる。

だが、同時に日本の学校には違和感も感じていたようだ。中学の体験入学では、皆受験勉強の大変さからか、学校生活を楽しめていない様子だったと指摘し、「授業では自分の意見を言う機会が少なく、みんな暗記をすればいい成績をもらえるとっていたので、自分の特徴についてあまり考えていなかった」¹⁵ようだと振り返った。

また、集合写真の中では、皆と同じ制服で、規則通りの髪型に整えているのに、なぜか、自分一人が浮いてしまっているのを感じたと言う。髪の色だけでなく、立ち姿もやはりクラスメートとはどこか違って見える。クラスメートは皆親切で、よくしてくれたのは間違いのないのだが、どう頑張っても自分は違うのだという疎外感も感じていたようだった。

3. 大学1年生 (2020～2021)

3. 1. 大学入学

卒業する兄と入れ替わりになるように、Yは筆者の勤務するボウドイン大学に入学した。日本語のクラス分け試験の結果、Yには初級文法が終わった後の、中級の3年生のクラスから始めてもらうことにした。会話の力は素晴らしかったが、漢字が少し弱く、文法も抜けている部分がある印象だった。後に、Yにとって以前の日本語学習はあまりいい思い出ではなかったこ

14～15 Yの日本語5年生時のジャーナル #3 クラスメートへのコメント

とを知るのだが、それにもかかわらず履修を決めた理由を尋ねると、日本との関係を完全に切りたくはなかったと振り返った。今ここでやめてしまうと、日本語を話すチャンスがほとんどなくなり、日本語を失ってしまうだろうと思ったと。また、運動部の活動と専攻科目の勉強で時間が取れず、日本語プログラムとの関係を深めないまま卒業したことを兄は悔いているのかもしれないと思ったことも、履修の理由として挙げてくれた。Yは、兄の足跡のない所で、兄と比べられることのない環境で、日本語を学べるチャンスだと思ったのかもしれない。

3. 2. 秋学期

Yにとっての初めての学期はコロナ禍真最中であった。Yたち新生はキャンパスに集められるも、対面授業は新生必修のセミナーの授業のみで、他はオンラインのリモート授業であった。キャンパスにはいても、自由に友人たちと集うこともできない状態だった。

Yの入った日本語の3年生クラスには、本人の他に日本語継承話者がもう一人いたが、他は皆大学入学後に日本語学習を始めた者ばかりだった。隔週に一度、オンラインのオフィスアワーで筆者と面談をし、授業の内容の他にも、さまざまなことを話すようになる。コースが進むにつれ、漢字や文法には少し問題があるが、自分の日本語はそれほど悪くないかかもしれないと思えるようになったと話してくれたのを思い出す。苦手とする漢字をきちんとやり直してみようと思い、頑張ってみたところ、「なんだ。やれば、覚えられるじゃんと思えてきた」と嬉しそうに語ったのが印象に残る。

期末には「おすすめの場所」というテーマで作文を書き、発表するというプロジェクトを課した。自分にとって大切な場所を一つ選び、それについてよく考え、読者をその場所に行ってみたい気持ちにさせるようにするものだった。筆者は、自分の経験や思い出を語るのではなく、その場所を客観的な目で見直して書くように促した。書き始めるまでに、何度も個人面談をし、内容についてアウトプットしてもらいスタイルを進めた。個人面談では、兄とともに日本で過ごした夏の思い出の数々の合間に、日本では兄ばかり最良されていると感じていたことなども飛び出したが、最終的にYが選んだのは、母親の実家付近の神社であった。賑やかな町の中にありながら、そこは独特の静けさをもつこと、そして、日本にならどこにでもあるようなありふれた神社であるが故の良さを綴ってくれた。見過ごされてしまうような普通の風景の中に、日本の良さはあるのではないかということに、Yが気づいてくれたと筆者は感じた。

3. 3. 春学期

春学期も引き続き、授業はオンラインのみとなったが、Yは日本語3年生の後半の授業を受講した。キャンパスに戻れないYは、友人たちと海辺の町の空き家を借り、共同生活をした。隔週のオフィスアワーでは、友人たちとの暮らしの楽しさ、大変さを語ってくれた。寒中水泳に挑み、その後アイスクリームを食べて帰った話なども聞かせてくれた。今回の期末プロジェクトは、好きな食べ物を選び、その良さについて客観的に説明するものだったが、Yはお好み焼きを選んだ。好きなものを入れて、みんなで作って食べ、いい思い出を作ることができる食べ物だと、「共有」というキーワードで、お好み焼きを捉えた素晴らしい作文になった。授業の外では、大学のあるブランズウィック市のお年寄りバスさんとの交流が始まった。時折会って話を聞いたりする関係はその後続く。

3. 4. 夏休み

大学1年の夏休みには、Yは、自閉症の子供を預かる保育所でのインターンをした。申し込みの際に添付するエッセイの内容について筆者も相談を受け、志望動機や、仕事から学びたいこと、自分にその仕事ができると考える理由などについて、日本語で話してもらいながら、考えを深める手伝いをした。

4. 大学2年生 (2021～2022)

Yの大学2年目は、年間を通じてマスク着用の形ではあったが、学生全員がキャンパスに戻り、対面授業となった。初めて筆者のオフィスにやってきたYは、大きな目をさらに大きくしながら「先生って、大きかったんですね」と言ってくれた。Zoomの向こう側に遠く離れていた人々との距離を、しっかり肌感覚で取り戻そうとする様子が嬉しかった。久しぶりのキャンパスで水を得た魚のように生き生きし始めたYの大学生活は、ここから大きく動き始めることになる。本人も認めるようにLA (Learning Assistant) の仕事を始めたことが、何よりも大きなことであった。

4. 1. LAの仕事

この年から卒業するまでの3年間、Yはゼロから日本語を始める初級クラスのLAとして活

躍することになる。日本語のプログラムのコース履修者は、毎週1回、授業時間外に設けられた30分程のLAのセッションに出席することになっている。ここでは、ドリルプラクティスや会話練習の他、授業で扱う内容及び、プロジェクトに関するディスカッションなどが1対1の形で行われる。Yにやってみないかと打診すると、二つ返事で引き受けてくれた。以後、Yとは毎週1時間程、LAセッションのためのミーティングを行い、それは卒業まで続く。教材の説明だけでなく、学習者がどのように学んで行くか、そしてどんなところが難しいのか、などについてもできる限り詳しく説明するようにしてみた。Yは終始目を輝かせ、「へえ」を連発し、熱心にメモをとりながら話を聞いてくれた。また、筆者の気づかない学習者の躓きや、学習者からは言いにくい要望なども、上手に筆者に伝えてくれた。Yのセッションは学習者たちにも極めて好評で、皆、Yにいいところを見せようと頑張ってくれている様子で、中には、大学生活での悩み事なども相談する者もいるようだった。

春学期の前半が終わった段階(YのLAの経験が1学期と半分となった時点)で、筆者の研究のためもあり、LAの仕事についての思いを聞いてみた。LAを引き受けた動機を聞くとすぐに挙げたのが、学習者がどのようにゼロから習っていくのか知りたかったことと、自分の言語である日本語がどれくらい難しいのか知りたかったということであった。そして、同世代の者たちと、日本への興味を共有したかったことも付け加えた。自分の持っているものがどんなのか知りたい気持ちと、それを誰かと共有したい思いが、YをしてLAの仕事に飛び込ませたと思われる。

LAをやってみて良かったと思うことはあるかと問うと、学習者の頑張りを目にできたことを挙げた。「難しい難しいって言いながらも、日本語にチャレンジしていてすごい！」と言い、「こんなに早いスピードで、ひらがな、カタカナを覚えて、使えるようになってすごい！」と意欲的に日本語に取り組む学習者への敬意を述べ、その姿を見て、自分も頑張ろうと思えたとも話した。また、「自分にとって当たり前の日本語を、こんなにも一生懸命に勉強しているのが見れて、毎回嬉しくなる」と続け、学習者は日本語だから頑張っている、日本語には頑張るだけの価値があるのだと、自分の持っている「日本」の価値を再認識させられた点を強調した。

そして、「お母さんがプッシュしてくれたおかげで、日本語のLAができるぐらいの日本語をキープすることができた。お母さん、ありがとうと言いたい」。「日本にいれば、なんの苦勞もなかったのに、わざわざアメリカに来て、英語を頑張って、お父さんに会って結婚してくれて私が生まれた。お母さん、ありがとうって言いたい」と、大変な思いをしてまで、自分に日

本語を渡してくれた母親に対する強い感謝へと話は向かった。仕事は楽しいかと尋ねた筆者に、「『大学で何をやってるの?』と聞かれたら、普通は専攻なんかを答えると思うけど、私は日本語の LA をやってると言ってる」と、プライドを持って LA 活動を行っているのだという気持ちを滲ませ、「他のクラスは難しいけど、自分にもできることがあるんだと思えた」と結んだ。

頑張る学習者の姿から、自分も頑張ろうと勇気づけられ、自分の持つ「日本」の価値を再認識し、それを受け継がせてくれた母親への強い感謝の念を抱き、そして、自分にも何かできることがあるのだという自信を持てるに至ったようだ。言ってしまうと学生アルバイトにすぎない LA の仕事に真剣に向き合い、ここまで深く考える Y の姿に胸を打たれた。

4. 2. JSA

LA の活動と並行して、コロナ禍で活動休止に追い込まれていた学生の日本クラブ JSA (Japanese Students Association) を再開させるため、Y 同様父がアメリカ人で母が日本人の日本語継承話者の学生と 2人で、リーダーとして動き始めたことも、大きな一歩であった。何かから始めればいいのかわからないところからのスタートとなったが、「まずはやってみよう」と、Yらはメンバーの募集、イベントの発案、執行、大学との交渉を、試行錯誤を繰り返しながら頑張った。日本にルーツを持つ学生や日本語学習者だけでなく、日本に興味のある者なら誰でも歓迎するというスタンスで会員数を増やし続け、現在 JSA は極めて安定したクラブとなっている。

4. 3. 日本語 4 年生

秋学期に Y は、先学期の続きのコースとして、筆者の日本語 4 年生を受講した。ここでは、中間に就職プロジェクトと、期末に自分で描いた絵を分析するプロジェクトの 2つが課された。就職プロジェクトは、まず、クラスメートからもらった第 1 印象をもとに、自己分析をして、自分に適した職業はどんなものであるか考え、それを作文にするものである。Y は優しく、思いやりがありそう、温かそう、話しやすい雰囲気を作ってくれそう、しっかりしていそう、几帳面に見える、などクラスメートからは極めて好意的な第一印象を挙げてもらっていた。人と関わるのが好きなこと、子供好きなこと、科学の分野に興味があることを活かせるということで、Y は小学校の保健の先生または、看護師が適職であるという作文を書いた。

期末には自分の描いた絵を分析して作文を書くプロジェクト¹⁶を行った。絵は、授業時間の40分ほどを使って描いてもらったが、家、太陽、川、木、柵を必ず含め、それ以外の物も1つ以上は入れれば、どんな絵になっても構わないとした。絵は事前説明や予告なしに、当日に描いてもらった。その後、家は自分を、太陽は父親の影響を、川は母親の影響を、木は文化的アイデンティティを、柵は自分と他者との境界を、それぞれ表すものとし、それ以外に描き加えたものが何を表すかは自由に考えるという条件で、その絵からどんな自分が見えてくるかを考えてもらった。分析に際しては、絵の中の構成要素を個別に分析するだけでなく、絵全体から見えてくる自分の姿についても分析するように促した。

Yは右のような絵を描き、これを「共有」というキーワードで読み解いた。シャイな父(太陽)からの光と、優しく頭のいい母(川)からの水をもらいながら成長した自身のアイデンティティ(木)は、可愛い小鳥を宿らせ、果実を実らせる。やがてその果実は落ち、誰かが食べる。父母



それぞれから譲り受けた文化的な恵みを、誰かと共有するのが自分なのだろうとYは分析した。また、家(自分)の屋根に見えるサンタクロースも幸せを共有する存在であるが、人知れず贈り物を届ける彼の行動は、人々の感謝や称賛を目的としたものではない。彼は幸せを共有することが、自分の幸せだと知っているのだとも述べた。異なる文化的背景を持ち寄って結ばれた両親が、互いの文化を尊重しあう姿を見てきたからこそ、「共有」して受け入れることの大切さを知ることができたのだとし、「将来、新しい人と共有し、繋がりを作り続けたら、私のアイデンティティは変わっていくだろうがそれは弱いことではなく、良いことなのだ。(中略)他の人を受け入れて、新しいことを学びながら、自分が変わっていくのは、自分に自信があって、共有の大切さがわかるからだと思う』¹⁷とYは結んでいる。

16 筆者がアメリカの大学院進学前に在籍した英語コースの恩師 Michelle Ueland 氏 (現ジョージタウン大 Faculty Director, Language Center) がクラス活動として行ったもの。

17 Yの日本語4年生時の作文『この絵から見えてくる自分』

4. 4. 夏休み

日本語のコースを3学期間受講し、LA や JSA の活動を1年間やり切った後の夏を、Y は単身日本で過ごすチャンスを得た。大学の基金から援助を受け、日本の老人ホームでインターンシップをさせてもらうことになったのだ。辛かった補習校でいつも目をかけてくださっていた先生の紹介をいただいていたことだった。アパートの契約こそは母親の力を借りたYだが、その他は完全に自力で乗り切り、老人ホームの人たちとの人間関係も上手に作り上げた様子だった。日本の介護システムをよく観察するとともに、仕事で使われる日本語の専門用語、医学用語などをノートにまとめ勉強することも始めた。夏の間に二度ほどZoomで話をしたのだが、「こんなに書いたんだよ！」と嬉しそうにノートを見せてくれた。

毎週金曜の仕事終わりに、電車で1時間半ほどの距離にある母親の実家の祖父母宅に行き、そこで週末を過ごし、月曜の早朝、直接職場に出勤することを続けた。コロナ禍までの毎年の帰省では、祖父母と話す時にはいつでも母親が隣にいて、代わりに答えてくれたのだが、今回はそうはいかず、初めて、自分一人で祖父母とのコミュニケーションをとらなければならなかった。

ある週末、何気なく祖母に「お祖母ちゃんは、どうして祖父ちゃんと結婚したの」と尋ねると、祖母が急に泣き出してしまう。聞くべきことではなかったかと思い、祖母に謝罪をし、話題を変えた。次の週末にまた、祖父母宅を訪れると、祖母は今度は泣くことなく、辛かった戦争の話と、二人の馴れ初めを語って聞かせてくれた。祖母に急な涙を流させたものは、辛い時代の思い出ではなさそうだと感じたYは、その後も、祖母のこの涙について考え続けることになる。

5. 大学3年生 (2022～2023)

5. 1. 日本語5年生

本校の日本語プログラムには4年生までのクラスしかなかったが、クラスを提供できなかった日本にルーツを持つ学生たちの強い要望に答える形で、日本語5年生のコースを新設し、Yもそれに参加した。参加者はYの他に、Yのようにアメリカ人の父親と日本人の母親を持ち、アメリカで生まれ育ったA、英国人の父親と日本人の母親を持ち、ヨーロッパの国々を転々としながら育つが、実家は現在東京にあるB、そして両親ともに日本人だが、小学校入学前に父

親の仕事のためにアメリカに渡り、アメリカで育ったCとDの4人がいた。筆者はこの全員とLAの仕事やJSAの活動などを通じ以前から気軽に話のできる関係であったが、どの者も自らのアイデンティティーについての割り切れぬ思いのようなものを抱えているように筆者には感じられていた。

そこで、授業の目標は「自分の持っているものは何か深く考え、それについて自信を持つこと」とした。授業は、毎回日本人向けに書かれた長い文章を読み、担当者が教材の内容について説明し、司会となって討論を進める形で行われた。(1)自分が何を持って生まれてきて、どう育ってきたかについて振り返り、(2)その影響でどんな自分になったかを考え、(3)受け継いだものの中で最も大きなものの一つである日本語について客観的に見、(4)自分はどう生きていき、(5)そしてどう死ぬのかについても思いを馳せてみるという流れでコースを構想した。具体的には、(1)名前と家庭で大切にされてきたもの(各自の名前の由来について発表し合うと同時に、各家庭で大切にしてきた約束事、教育方針などを共有しあった)、(2)アイデンティティー(日独ハーフであるサンドラ・ヘフェリンのエッセイ)、(3)敬語(復習として5人全員が担当分の敬語文法項目について発表し合っ、『させていただく』、『タメ口』について読み討論した。その後、実際に敬語を使って模擬面接を行なった。また、懇意の早稲田大の教授を3度ほどゲストとして迎え、日本企業AEONの方達にも来ていただき敬語で話す機会を得た)、(4)生き方について(村上春樹『職業としての小説家』)、(5)日本の怪談(杉浦日向子の劇画『百物語』の分析と夏目漱石の『夢十夜』)と進めた。

コース終了後のアンケートからは、徹底的に日本語を使った充実感と、日本語でここまでできるのかという自信を参加者が感じてくれた様子が伝わってきた。Yも「この授業で、作文を書いたり、百物語を分析したり、記事を読んで授業中意見を出したり、たいてい英語でする事を日本語でたくさんやってみた¹⁸と振り返った。

5. 1. 1. ジャーナルでの語り合い

コースの内容と並行する形で、毎週ジャーナルを書き、都度クラスメートと共有し、互いにコメントし合った。ジャーナルは基本的に各自が書きたいことを書いてみる形としたが、課題だから書かされているというよりは、自分の思いや考えをクラスメートに聞いてもらいたいという気持ちで書かれたものばかりであった。ジャーナルの長さも少しずつ長いものになってい

18~19 Yの日本語5年生時の作文『私の日本』

き、コメントも「分かるよ、それ!」といった共感や、「こんなこと考えるなんてすごい!」という励まし、そして、もっと内容を理解したいための質問で溢れていた。加えて時折、「でも、こんな見方もあるんじゃない?」という意見も出て、生産的なディスカッションにつながるものが多かった。

また、似通った背景を持ったこのメンバーでなければ、語り合いにくく、分かり合えないトピックも多かった。例えば、アメリカでは大人しめだと言われる服でも、日本で着ると祖父母や親戚に顔を顰められてしまう「日本っぽい服とアメリカっぽい服の違い」について、日本語と英語を、どんな時にどう使い分けているかの「言語のスイッチング」について、「つつい謝り過ぎてしまう自分」について、そして「結婚相手」や、「将来の子育て」などについて、様々な議論が展開されていた。

Yはジャーナルを振り返り、それは自分が英語でつける日記に近いものであったとし、「気持ちや考えを、まさか日本語でもはっきり表せるようになる時があるとは、三年前の自分は信じていなかったと思う」⁹と述べている。

5. 1. 2. 期末プロジェクト

期末プロジェクトとして、全てのジャーナルを読み返し、そこから見えてくるものについて作文を書いた。今回も書き始める前に、筆者との数回の面談で考えをまとめてもらう形はとったが、その前に各自がクラスメート全員のものを読み返し、心に残ったことなどを授業で共有し、一人一人について討論してみた。Yのジャーナルへの感想としてまず挙げられたのが、正直さと、家族を大切にする気持ちであった。自分の弱いところも曝け出して共感でき、家族の話題が頻繁に出てくるので、家族を大切にしているのが伝わるとの意見が聞かれた。そして、見過ごしてしまいがちな小さなことを材料にしながら、それを深めていっている点や、一人日本で過ごした昨夏の経験の影響が様々なところに見えている点についても指摘があった。

その後Yは『私の日本』というタイトルで作文をまとめた。この作文をYは、祖母のあの涙の理由を考えることから始める。直接の原因は祖父との馴れ初めを尋ねたことだが、以前の自分であればそんなことはしなかったであろうことに気づく。日本の家族と話す時には、いつも母が代わりに話してくれ、自分は隣で笑っていればよかった。母を通して日本の祖父母と繋がっているだけの自分であったので、祖父母が結ばれた理由に興味を持てなかったとしても不思議はない。「アメリカに住んでいても、日本とのつながりを持つとするのは母のためだっ

た」²⁰のを認め、以前の「日本」は自分のものではなく、母のもの、つまりは「母の日本」であったと Y は述べる。続いて Y は「母の日本」に存在した幾つかの限界として、家族と繋がるためだけの日本語であったという狭さ、母の強制や励ましがなければ続けられないという受動性、分からなければすぐに母に尋ねられるという簡便性の3点を挙げる。そして、それらを踏まえた上で、「いつも『母の日本』に頼っていて、感謝の気持ちはあったが、自分から習おうとする意思はなかったため『母の日本』は、将来の自分と日本の繋がりを制限してしまうから、変化が必要だった」²¹のだと述べる。「母の日本」は、日本の家族と繋がることを主目的とした、狭く、自発性を欠いたものであったが故に、Y はそこから出て、「私の日本」に移らなければならなかったと言うのだ。

「母の日本」と重なる部分も多いとしながらも、Y は「私の日本」を「母や家族のためではなく、自分の意志で探した日本」²²であり、「自分自身の興味、冒険、発見の全部が混ざったもの」²³なのだを定義する。「私の日本」は、「日本語の授業、日本人会の会長、日本語のラーニングアシスタント (LA) としての仕事、今年度の日本でのインターン。。。高校の自分にはありえないほどの経験を、母がいないところでも見つけた」²⁴ことにより、少しずつ現れたのであり、自分一人で過ごしたあの夏休みに突然現れたのではない点を強調する。つまり、「私の日本」への移行は、大学入学を機に実家を離れ、「母の日本」に頼れなくなった時から少しずつ起こったと言うのだ。そして、このことを考えると、「『私の日本』とはたどり着けるゴールではなく、これからも続いていく大事なプロセスなのだ」²⁵と述べる。

ここで Y は祖母の涙に立ち戻り、「もしかしたら、祖母は私が『母の日本』から『私の日本』に成長していた事を気づいてくれたのかもしれない」²⁶と考える。実際の作文では、この辺り少し言葉足らずの感は否めないかもしれないが、筆者には十分に説得的で心を動かされるものであった。日本語が話せるのか、話せないのかよくわからなかったような孫が、きちんと大人になって目の前に立ち、自分の人生の深い部分について知ってくれようとしていることに不意に気付かされた喜びの涙なのではないかと筆者には感じられた。「そうやって私のことも思い遣ってくれるようになったんだねえ」という涙だったのではと思われたのだった。「日本語力に自信を持ち始めたおかげで、母がいなくてもコミュニケーションを取れることを実感し、大事な会話ができるようになった」²⁷と Y は述べるが、母のために、母の力を借りてやっと繋

20～27 Y の日本語5年生時の作文『私の日本』

がっていただけの日本の家族の手を、今、自らの意志と力によって、こちらから強く握り返している Y の姿がはっきり見て取れるような気がした。

5. 2. リーダーとして、模範としての辛さ（大きな役割ゆえの苦悩）

秋学期も残り2週間となった頃、Y が LA として付き合いしてきた学生の一人が、不慮の事故で急逝してしまう。共に頑張ってきた仲間の死を前にどうすればいいのかわからない学生たち。筆者も呆然と立ち尽くすしかない状態であったが、同時に、教員として、ここからどう学生をひっぱり、学期末まで連れていくかを考えている自分に気づき、「学生の命を何だと思っているのか」と自分を責めるような気持ちになってしまった。そんな時、Y は、学生たち一人一人に「話したいとか、顔が見たいとか思ったら、いつでも連絡をして」と声をかけ、亡くなった学生の思い出を語りあう場を作ってくれた。クラスは Y の励ましのおかげで、何とか期末を乗り切ることができた。

だが、その直後、Y は倒れてしまう。集中してものを考えることが全くできなくなってしまったのだ。自分も大切な仲間を失った悲しみの中にながらも、周りにエネルギーを送り続け、ついには走れなくなってしまったようだった。「すみません。でも、これだけはきちんと書きたいので」と、『私の日本』の作文の提出期限の延長を申し出る Y に筆者は、頼りにしすぎてここまで無理をさせてしまったことを詫言するしかできなかった。リーダーとして、模範として頑張る Y の辛さに、長い間気づくことがなかった自分が本当に恥ずかしかった。

ジャーナルを振り返ると、期待に応えたいという気持ちと、期待という形に自分を押し込めたくはないという気持ちの間で揺れ動く Y の姿が浮かんでくる。若い時は自分を探す時と言われるが、Y はそれに強いプレッシャーを感じるという。自分はこうであると決めつけてしまうと、「毎日のように自分は変わっていくのに、他の人の意見に気を使^マってしまい、自分のためより外のレピュテーションのために生きているように感じて^マいて、すごく嫌です」²⁸とし、「『アイデンティティーはたどりつけるものではない。逆に、アイデンティティーというものはないのかな』と信じ始めています」²⁹とも語っている。自分とは何かという問いの答えを探しながらも、「自分とは～である」と言い切ってしまうたくないという Y の叫びが聞こえるようではないか。

28～29 Y の日本語5年生時の作文『私の日本』

5. 3. 夏休み

今回 Y はアメリカの地元の老人ホームでインターンをした。昨年の日本の老人ホームでの経験との比較から、アメリカのシステムの様々な問題点に気付いた様子であった。また、なぜ老人ホームの仕事なのかと問うと、歳を取ってくると、その人の本性のようなものがそのままの形で出てくると言っていて、あるお爺さんの話をしてくれた。そのお爺さんは、日中休むことなく、ずっと、施設の中をぐるぐる周回しているのだという。気をつけてよく見ていると、そのお爺さんは、施設を一周する度に誰かの鉢植えに水をやっていたのだった。「早く、大きく育て！」と水をやりつづけるお爺さんの優しさが伝わってきて、筆者も胸を打たれた。

6. 大学4年生 (2023～2024)

6. 1. 似た境遇の仲間の重要性

筆者の授業を取ることはなくなってしまったが、Y とは毎週一度の LA ミーティングなどの機会に、引き続き様々なことを話した。折に触れ日本語5年生の授業は本当に良かったと繰り返す Y に、その理由を尋ねてみた。2年生の時から会長としてリードしてきた JSA だが、リードはしているものの、JSA の活動の対象は日本語履修者たちであり、ある程度日本語のできる継承話者たちは遠慮せざるを得ない状態で、Y のような背景を持つ者同士が自らの経験を共有したり、そのことについて話し合ったりする機会は、実のところ全く無いのだと言う。JSA は居場所には違いないが、リードする自分らが逆に置き去りにされていくのを感じるのだとして、日本語5年生のクラスこそが、似た背景を持った者同士が深い部分で語り合える唯一の場所であったと振り返った。これを聞いた筆者は胸をつかれる思いがした。LA や JSA の活動で重要な役割を担ってもらうことにより、日本語プログラムに居場所を感じてもらえ、自分を高めてもらっているのだと思い込んでいたのだが、重要な役割を得てリードする側がそもそも抱えている問題は残り続けるのだということに気がついていなかった。

また、筆者が日本語5年生のコース開講時に想定していたのは、クラス活動を通じて各自が各々に、各々の中で、自分自身を深めていく形であったのだが、自分自身を深く掘ることができるのは、仲間がいてこそなのだとすることを教えられた思いだった。「この前発表した『私の日本』は、有留先生とクラスメートみんなの手伝いで見つけられた物なので、心から感謝

しています」³⁰と最後のジャーナルに Y の残した言葉は、決してお世辞ではなく、心からの声だったのだろう。

6. 2. ダブルネガティブ (double negative)

4年生秋学期に Y は日本史の授業を受講した。補習校時代には試験や授業が苦痛なだけであったという日本史だが、今回改めてその面白さに気がついたらと語る Y に、何故もう一度やる気になったのかと尋ねると、「リベンジです!」と答えた。辛かった時のことを忘れたわけではないが、日系人として日本と自分の繋がりに自信が持てるようになってきて、もう一度やり直してみてもいいと思えるようになったと言うのだ。そして、「ダブルネガティブです!」と続けた。Y によるとダブルネガティブとは、負のものと、負のものを掛け合わせると、正になることで、辛かった補習校時代をもう一度振り返ってみる勇気を指すようだった。負であったものを、それがいかに負であったかももう一度振り返り、それを受け入れ、乗り越え、正にすること。それを「ダブルネガティブ」という言葉で表現していたのだ。日本語5年生の仲間は、似た背景を持ちながら、同じところも違うところもあることを知り、皆それぞれに大変なことがあるのだと気づけたことで、自分の過去への見方も変わったのかもしれないとして、日本語5年生の仲間で、辛かった時代にもう一度向き合う勇気をくれたのだと思うと話してくれた。ここでも、日本語5年生の仲間で重要な影響を与えていた。

6. 3. 卒業後の進路

「私の日本」に気づいた Y なので、卒業後の進路は何か日本に関係のあることに見出してくれるものと筆者は思っていたのだが、Y が選んだのは老人問題であった。老人だから静かで何もできないと思うのは失礼なことだ。自分や親がそんな目で見られるのは堪らない。老人を特別視せず、一緒に生き、互いに学び合えるようにすべきだと Y は言う。両親から受け継いだものをしっかりと認識し、自分の2本の足できちんと立てるようになった Y が考えたのは、「人の役に立ちたい」ということであった。Y は権威あるフェローシップを得て、卒業後の1年間老人問題の研究に集中する。

30 Y の日本語5年生時のジャーナル #13

7. 結びにかえて

日本人の母のもとに生まれることで自然にもたらされはしたが、疎外感や劣等感の根源にもなっていた「日本」にもう一度向き合い、それを共有しながら仲間と繋がることで、人はこれほど成長できるものなのか。そして同じ境遇の仲間たちと経験を共有し、共に考えるということが、これほどまでに大切なことであったのか。実に多くのことをYには教えられた。卒業式の日に手渡してくれた手紙には、4年間で得た一番のものは、自分について自信を持つようになったことだとあった。日本語を教えていて、本当に、良かったと思った。

それぞれの名前に込められた思いと、それぞれの家族が大切にしている考え方についてクラスで話し合ったことは先に述べたが、子を思う親の強い愛情の向こうに、子供のない筆者などにはわからぬ、何か凄みのようなものを見た気がした。Yが母親の言として紹介した「あんたが日本語話せなかったら、あたしゃ負けだよ」を聞いた時、「まさに命懸け」という言葉が浮かび、不意に涙が込みあげてきた。あの涙をどう堪えたのだろうか。今ではよく思い出せない。

自分の将来の子育てについて語るジャーナルの中でYは、常々母にどんな人と一緒になっても構わないが、孫に日本語で話しかけるのを嫌がらない人にしろと言われていることに触れ、「母は孫に向かって日本語を話して、英語で返されても構わないかもしれないが、私は個人的にこれだけで満足するのかな、とよく考えています」³¹と述べ、「私の子供にも、私が知っている『日本』を全部教えたい」³²ときっぱり言い切っている。「命懸け」で伝えられた「母の日本」は「私の日本」となり、そして、それは消えることのない灯となって、やがて、次の世代に力強く受け継がれるのだろう。

31～32 Yの日本語5年生時のジャーナル #11